人権ほっと五年二月号

「バイアスを緩めてみよう」

大阪教育大学
安達　智子

私は心理学の専門家で、ジェンダー・バイアス、つまり性別にまつわる固定的で偏った意識ついて研究をしています。そのため、どんな人に対しても、公平・公正いられると思われがちです。しかし、残念ながらそうではありません。いろいろな場面で、ジェンダー・バイアスにとらわれている自分に気づいて、はっとする事があります。

たとえば以前に仕事の関係で、とある研究機関の所長とお会いする機会があったのですが、私は一方的に男性の所長を想像していました。頭のなかで自動的に「管理職＝男性」というバイアスが活性化していたのです。実際には素敵な女性の所長さんだったのですが、お目にかかったときに、「バイアスが作動していたな」と気がつきました。

バイアスをもつことは特別な現象ではなく、専門家であってもバイアスの影響から免れないと言われています。しかし一方で、日常生活のなかで固定的なものの見方を緩めていくこともできます。先の例でいうと、私は女性の所長に出会ったことで、管理職には男性が多いけれど、女性管理職として活躍する人がいるのだと、見解が広がりました。このように、色々な人に出会うこと、とくに「□＝□」、たとえば、幼稚園の先生＝女性、パイロット＝男性などと、頭のなかの結びつきがあるときには、それとは異なる人に出会うことです。あるいは、自分が思うところの「普通」とは違う生き方をする人を探してみることにも、バイアスを緩める効果があります。今まで「当たり前」「普通」だと思い込んでいたこととは違うケースが世の中には沢山あることが分かります。また、何が普通で当たり前なのか、絶対的な基準はなく、社会や文化、価値観によって様々であることに気づくでしょう。